

第 17 回研究会

2024 年 5 月 18 日

2024 年度第 1 回目となる 17 回目のスパルタンイングリッシュは、久しぶりに佐藤剛の授業を公開しました。テーマは文法指導です。よく、大学の教育法の授業を受けている学生や、教員研修を受講いただいた先生から、文法指導はしないのですか？または文法の指導はどうされているのですか？という質問を受けることがよくあります。限られた時間内で何とか説明しようとするのですが、やはり授業や研修の後の短い時間では、こちらも十分に説明することが難しいので、なかなかご納得いただけず、お互いに釈然としないものがありました。確かに、これまで公開する授業はリプロダクションをはじめとする発表活動やコミュニケーション活動が多く、文法の指導を見ていただくことや話し合うことがなかなかなかったことも事実だと思います。そこで、今回は僕がどのように文法の指導をしていたのか、50 分まるまる見ていただき、文法の指導はどうあるべきかについて考えました。

青森県内の先生を中心に、千葉県や愛知県まで全国から合計 20 名の参加がありました。事前申し込みの際にも

「普段の授業展開で、あるいは 50 分間で文法事項を定着させることができているか不安です。」

「文法事項の導入のタイミングや、導入方法で意識されている点を教えていただきたいです。 また、文

法事項の定着に向けての手立ても教えていただきたいです。」

「文法指導にかかる時間、日本語での説明量」

のように、たくさんの質問が寄せられたことから、コミュニケーション・言語活動などが主流の現在の英語の授業において、「文法指導をどうするか？」が先生方の中で大きな問題となっていることが感じられました。

授業について

対象学年

中学 1 学年

内容

三人称単数について、肯定文・疑問文・否定文の形式と意味をユニットの最後にまとめる「文法のまとめ」の授業

授業者から

- 今回公開する授業は 私が中学校の教師として指導していた文法指導の授業
- 対象学年は中学校 1 年生、目標文型は一般動詞三人称単数動詞
- 文法指導に限らず、(現在の大学の授業でも) 授業は教師の説明や解説などは極力省き、生徒の活動時間や場面を確保するように心がけています。ただ、そんな授業スタイルの中で文法指導をどのようにすればよいのか、ずっと試行錯誤しておりました。文法の解説を教師主導で行って黒板をノートに書かせたり、ワークシートを使ってグループをしたりと自分でいろいろ試したり、さまざまな授業研究会に参加してそこで学んだことを自分なりにアレンジして行ったのが今回公開するスタイル
- 単元のはじめには、明示的な文法の指導は一切せず、オーラルイントロダクションやスピーチやリプロダクションなど表現活動などをおして目標文型を言わせてみたり書かせてみたりを繰り返して、単元の最後、8 時間目・9 時間目に行う授業スタイル

丹藤先生から

今回の授業を観察する観点

- 今の文法指導の主流はフォーカス・オン・フォームであり、場面の中で話をしてこういう文法が必要であると生徒が考えるような指導の観点
- 「帰納的＝たくさんの例を示し、そこから共通のルールを導き出す」と「演繹的：進行形は be 動詞 +ing だよと教えてしまう」のどちらがよいのか？週 4 時間で授業をやらないといけないときに、演繹的スタイルの方が早いのではないのか？という考え方は当然ある。演繹⇔帰納の観点
- 英語は「形式＝どういう形をしているか」と「意味＝どんな意味を示すのか」と「使用＝どんな場面で使うのか」の 3 つが一緒にならないと使えない
- 文法を言葉で説明することを「メタ言語」と呼ぶ。中学生がこのメタ言語を使用できるようにするためにはどうすればいいのか？

これらのように、佐藤先生の授業の背景にあるものを考えながら見てほしい、「これが本当に正しいのか？」自分の経験とか知識と照らし合わせてみて、いわゆるクリティカルシンキングで観察することでより深い研修の機会となる

1 帯活動 Last Sentence Dictation

- | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none">(1) 英語であいさつし説明を聞く(2) 教師の後に続いて教科書を読む(3) 1 分間テストに向けて勉強する(4) 教師が読んだ最後の文を書きとる |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

- 長先生や杉本先生の研究会で教わった、活動で毎回、授業のはじまりにルーティンワークとして行っている活動
- 1年生の一番初めのレッスンから毎回1つずつ進めて、今やっているレッスンまで来たら、1年生の一番初めのレッスンに戻る、を3年間繰り返している。だから、2年生は1年生&2年生の教科書を、3年生は1年生&2年生&3年生の教科書を授業に持ってくることになっている。
- 長先生から「既習事項の復習というとは前時の学習内容を復習するとはか考えていない先生が多いが、既習事項は1年生から今までやってきたことをすべて含むからね」と教えていただいた

フロアからの意見・質問

(参加者)

今回「No, I'm not.」を出題しているが、これは本時のターゲット文型か？出題する英文はどうやって選んでいるのか？

(佐藤)

ターゲットになる文法を含むものを毎回出すというものでもない。6時間目であること、生徒のその時の雰囲気、ここで難しいのを出してしまうとこの後の授業がやりにくくなりそうなど、様々な状況を考慮して出題する英文を選んでいる。

(杉本先生)

ルーティンワークであるということは毎日やっているということで、1年生のレッスン1から毎回1ページずつ進むということは、スケジュール的にも今日はどこをやるのか生徒はちゃんとわかっているということになる。だから、授業の前の休み時間に生徒の様子を見るとその日の箇所を一生懸命読んでいる。なかには、「今日は絶対この英文だよな？」とヤマをはっていたりもする。生徒がヤマをはる英文は、そのページのキーセンテンスであることが多いわけだが、僕はだいたいそれを外すようにしている。なぜかというと、この Last Sentence Dictation の一番大きな理由は音読練習の推進することだからである。一回一回のテストができた／できないよりも、音読の練習を毎回継続することで、暗唱してしまう、できて当たり前くらいに落とし込むことがルーティンワークには必要だと思う。また、毎回やっていることで、greeting からここまでは英語の指示だけ説明なしでできてしまうことが理想だろうと思う。

(参加者)

この活動は必要だと思う。なぜならば、書くためにはまず聞けないといけない。

(丹藤先生)

リスニングをするには、リスニングテストを繰り返してもよくならない。また、文字を見ながら聞くと、音声だけで聞くのとでは聞こえ方が全然違う。バズ・リーディングをやらせていたが、英語が読めない人にとって英語は単なる記号にしかならないので、読めることは前提になる。文字を見て音声化できることは英語学習の前提であるので、このディクテーションは初期の段階には特に大事ではないかと思っている。授業を見るときには「何のためにやっているのか」その目的を考えることが大事である。例えば、佐藤先生の授業を見て、ビンゴや今日は何の日などの活動を何のためにやっているのか分からずにやっている人が結構いる。今回も何のためのディクテーションなのか、そこをしっかりと分かってほしい。

2 文法のまとめ

(1) 指定された英文を書き込む、終わったらペア→周囲の人を手伝う

- 以下のワークシートに穴埋めする、
- 北原延晃先生の勉強会、北研で文法の導入として紹介されていた活動を単元の文法のまとめとして活用した。
- 生徒を立てさせて⇒書かせて、書けたら隣の人を見て⇒できてなかったら隣の人を助けてあげて、2 人とも書けたら⇒前後を見て、できてなかったら助けてあげて、前後全員書けたら座るシステム
- 今回は、以下のワークシートの一番右、三人称単数の Nana の列が目標文型であるが、既習の I や You も扱う。一人称・二人称を踏まえて、三人称単数を埋めることが今回のねらいである。もし、一人称・二人称の箇所が埋められない場合は、その時の文法のまとめプリントを参照するようにと指示を出している。

Lesson 5 文法のまとめ ～「I でも You でもないひとり・ひとつ」～

	私は（自分のことについて言うとき）	あなたは（相手に対して言うとき）	I でも You でもないひとりひとつの時 =
	I study English.	You()English.	Nana()English.
②			
		Yes, ()(). No, ()().	Yes, ()(). No, ()().
③			

フロアからの意見・質問

（参加者）

生徒を立てさせて書かせることで、活動的になり授業にメリハリがついていると感じる。ただ、今回の授業では、「study は y を i に変えて es をつける」と言っていたが、そのまま流すのではなく、「なぜ y を i に

変えるのか？」疑問を投げかけることによって、授業の流れを止めて、生徒が「なんでだろう？」と思考するタイミングを作ることができると思う。

(佐藤)

難しい判断になると思う。中学校1年生でも理解できるように、yをiに変える理由をどうやって説明するのか？そして、playの場合はなぜそのままsをつけるのかという例外も含めて説明の泥沼にはまることを避けたかった。説明しようとするればできなくもなかったが、「これはそういうものだよ」とした方がこの時点ではスムーズに授業が進むと判断した。

(参加者)

生徒の能力者にはどのように対応しているのか？

(佐藤)

IとYouのところは、どうしてもわからない場合は、前のプリントを見れば書けるようになっている。ターゲットとなる三人称単数の列は、これが書けるように、プレゼンをさせる・ライティングをさせる・音読させる・リプロダクションをさせるなど、単元を通していろいろな活動をやらせているので、できているはずだという前提と、それでもできない場合は生徒同士で教え合って書くという形をとっている。

(参加者)

5回も立って座ってを繰り返すこと、立ったまま書くことにびっくりした。また、生徒が一回書いたものを周りの生徒が書いたものを見て直しているので、そこに学び合いがあるのだと感じた。

先生は、ハンドアウトを肯定文⇒疑問文⇒否定文と縦に進めていたが、これを横に進めたらどうなると思うか？

(佐藤)

今回は既習である一人称・二人称とターゲットの三人称単数を明確に分けるために、縦方向に進めた。違うねらいであれば、ご提案のとおり横に進める方法もあると思う。

(参加者)

立って書かせるのは生徒にとって負担になっていないか？

(佐藤)

座って書くよりは大変かもしれないが、立った状態でstudyと1つ単語を書くことがそんなに負担にはならないと思う。そのリスクよりも、生徒が座ったということで、作業が終わったという見取りをするメリットを優先した。

(参加者)

自分が中学生の時は全員が座ったら＝出来たら次の活動に移るというよりは、時間で区切って、制限時間が終わったら次に進むということが多かったように思う。全員ができたらずえんという形をとることで、できないまま次の活動に行くということがなくなると感じたので、教育実習などでぜひ活用したいと思った。

(参加者)

ひとつずつ区切るのではなく、全部書き終わったら座るとしてはどうか？

(佐藤)

区切りを細かくせず、長くとればとるほど、能力差が出ると思う。どこまで能力の差が出るのを許容できるか、例えば一人称の列を一気にやっても、できる人とできない人の差がさほど出ないような生徒の実態であれば、そう思う。ただ、今回の生徒の実態を踏まえて、1列全部としてしまうと、すぐ座ってしまう班と、ずっと立っていないといけないうのの差が出てしまうので細かく刻んだ。

(杉本先生)

最初に「文法の指導は帰納的」にと話したことに関わるのですが、このような活動は実は非常に難しい。授業の様子を見ると、何となく通過しているように見えるが、I study English.がどういう意味か生徒は分かっているだろうか？現在形が持つ意味を理解できるのは、過去形や進行形、未来を表す表現などを扱ったところで、ようやくわかってくるものだろうと思う。Nanaは誰なのか？よく目標文型に出てくるようなシンプルな英文は意外と分かりにくかったりする。三人称単数が本当に分かるのは(=自分ですとんと落ちるのは)早くて中学校3年生、もっと言えば大学生くらいだろうと思う。例えば、Nana study English.といった場合、コミュニケーション的には通じないことはないわけです。でも、それじゃおかしいと気が付くのは、身の回りにあふれている英語と比べて、これ変だよなということに自分が気が付くという時だと思う。

(丹藤先生)

先生のお話ししたことには非常に強く共感する。大学生でも現在形を進行形だと勘違いしている人が多い。習慣という風にはとらえていない。だから、every day というのをつけることで意味が明確化するのだと思う。ワークシートにある例文が適切かどうかは非常に疑問が残ると思う。だから、すんと落ちるようになるにはもっと先、2年生・3年生になると思う。

(佐藤)

先生方がおっしゃるように、三人称単数が習得されるのはずっと後だと思う。ただ、どんなに英語ができる人でも、完全に三人称単数を理解している／習得しているということはないのだろうと思う。としたときに、中1のこの時期の段階として(完全なものではないにしても)どんなレベルの習得を目指すのかを考えた時にこの形を選択した。

また、これは脱文脈化した指導である。Nanaがいつどういう状況で、誰に向かって、何の目的で話した英文かは設定していない。この形で本当にいいのか当時も悩みながらやっていた。ただ、副詞句をつけたり、文脈の中に組み込むと、活動自体が非常に複雑なものになってしまうと思う。

(杉本先生)

こういう例文が一番シンプルでわかりやすいんだという前提そのものに疑問がある。コンテキストもない、バックグラウンドもない、人の顔も見えないところでやる方が文型の練習になるのだというのは、まさにルールを覚えるためのルールだというのであって、英語を使うための文法ではないと思ってしまう。文法を落としこむことはもちろん大事なんだけど、あまり早い段階で、あまり強調して、全員が座れないと終われないんだよとプレッシャーをかけるのはどうかと考えてしまう。反対にこれができるから、文法ができたと安心していいのか、そっちの方が怖い。それよりは間違えてもいいからどんどん使わせて言いたいことを言えるようにさせていくことの中で、よりよく正確に伝えるためにはというところにも

うちちょっと踏み込まないといけないと思う。教科書に載っているのでやらざるを得ないのだけど、指導者の方もかなり割り切らないといけないし、これができたら英語ができるというものでもないし、ひとつのステップとしてはいいよねという意味で、普段の授業に補足するものがないと練習をする一番の足元がぐらぐらする危険性があると思う。

(丹藤先生)

この授業の前にはインプットがたくさんあって、その上でこの段階のまとめをしようとしている授業である。だから、大きな授業の流れの中のひとつと捉える必要がある。

(2) 英文の作り方について自分の言葉でまとめる (グループ)

フロアからの意見・質問

(参加者)

文法のルールを自分の言葉でまとめるというのは、ちゃんと理解していないとできないことであるし、教師側としても、生徒がどれだけ文法を習得しているか把握できるいい活動だと思った。質問としては、最後のテストの採点と解説はどうするのか？

(佐藤)

次の時間に採点したものを返却している。このテストは全員ができるレベルに設定してあるので、これが全く書けないとか、全員共通してミスをするという想定はしていない。

(参加者)

中間評価として、自分が書いた文法のまとめを友達と見合うという時間があってもよいのではないかな？そこで、自分が足りない部分を確認できて、それを次の活動に反映していくというのがいいと思う。

(佐藤)

回収した生徒のまとめの中でよいものを3つ選んで次の時間に全員にシェアしている。その時間時間という短いスパンではなく、それを毎レッスン繰り返すという長いスパンで改善した方がいいと考えている。活動毎・授業毎・レッスン毎など中間評価にはいろんな間隔ものがあるが、今回のような活動の場合、その場でおたがいに見せ合っても「これいいね」とただ書き写すだけになってしまうと思う。それよりも、その場では生かせなくても優秀作品をファイリングさせておいて、次のレッスンの文法のまとめの時に生かした方がいいと判断した。

3 練習～確認テスト

(1) グループで口頭英作文の練習する

(2) 準備ができたら佐藤を呼びチェックを受ける

(3) 終わったグループは確認テストの勉強

(4) 確認テストを解答し、自己の理解を確認する

(杉本先生)

グループワークで練習をしていたが、あそこは一斉でパターンプラクティスをした方が、発話量を増やすことにつながったのではないかと思う、全体的に音読のようなものも含めて生徒の発話量が少なかったように思う。こういうまとめの前に、ターゲットとなる文型をどれだけ使わせているかが大事で、それを受けてここでまとめているということなので、使って使って使い倒してから、あれはこうだったんだよと説明する、なおかつそこから公式のような一般化できること説明する、読み取っていくことが理想だと思う。全員が授業に参加し、和気あいあいとした雰囲気であることは大事だと思うので、あとは以下に発話量を増やしていけるかの工夫があれば面白いなと思った。

(丹藤先生)

スモールクイズの問題を見て何を測ろうと思っていると思いますか？または自分だったらどうするなどの意見はあるか、話し合いたい。

SMALL QUIZ (day date)

Class

Name

1 () に適する語を書きなさい

(1) 私は英語を勉強します

I () English.

(2) ナナは英語を勉強しますか？

() Nana () English?

(3) ナナは英語を勉強します。

Nana () English.

2 日本語を英語に直しなさい。

(4) ナナは英語の勉強をしません。

(5) ミキはテニスをします。(教科書から出題)

3 できたらすごいボーナス問題 (パーフェクトなら 5 点)

私の父は、タクシーを運転しています。彼はそこの(スコットランド)の道をすべて知っています。

私の母は美術を教えています。あれらは彼女の絵です。

(参加者)

私であれば、教科名を変えたり、study 以外の動詞を使うと思う。

(参加者)

超初級、中級、応用レベルと様々な生徒のレベルを測れる問題になっていると思う。自分であればまとまった英文の中に間違った文を含めておいて訂正させる、それを踏まえて自分独自の英文を書かせるような問題を含めると思う。最後の「できたらすごいボーナス問題」は非常に高度な問題だと思う。

(参加者)

今日やった内容を全員ができることを確認するものだと考えれば、これでよいと思う。変に問題を変えてしまうと、そこがばやけてしまうところがある。

(丹藤先生)

これは知識・技能の確認になる、試行・判断・表現のものにはならない。例えば、学年の先生の日曜日の様子を示すような写真を並べて、知っている人の場面設定をつけた形で、英語で書かせてみてはどうか。

(杉本先生)

Small Quiz の small の意味が単元の確認というよりは「念押し」程度のもので、1～3 はパターンプラクティスだと思えば納得はする。3 番は「できたらすごいボーナス」にするのではなく、これをむしろ最終目標にした方がよいのではないかと思う。これの練習をさんざんしておいて、今日のようなまとめをするということになると思う。こういうコンテキストがあって、お父さんの写真や絵のようなものを紹介しているという場面の中でやっていく、それで自分のお父さんだったら何が言えるのかということのをさんざんやっておいてという意味で、「できたらすごい」ではなく「これができなきゃだめだよ」ということになる。英語を使うということの大前提にしたときに、コンテキストをいかに設定してその中で使うことで、現在形は人を紹介するときに使うのだということが分かる。現在形の分かりにくさをいかに自然に使わせるかということがあって、その一過程として文法の補強が必要だろうと思う。最後の問題があることで救われるなという印象を持った。

(佐藤)

ちょっと先生方にチャレンジしたい。これまで先生方がおっしゃった、絵を見てそれについてのスピーチをする、教科書の暗唱やリプロダクションはこの前の授業でやっている。そうだとすると、文法のまとめをどう分けるかについて考えてほしい。

(杉本先生)

基本的に文法を分けると難しいことになる。どんなに中学校でコミュニカティブにやっても、高校に行くと文法の指導が始まる。高校では文法用語を使いこなせないと授業の理解度が悪いことになってしまう。中学校では、studies と言えればよいとしても、高校では y を i に変えて云々ということになってしまう。ただ、一般動詞をまとめるというのは中 1 のこのタイミングなのか？というのは授業を見ながらずっと疑問に思っていた。

(丹藤先生)

Small Quiz もこの授業でやったことという意味で焦点化してやっているということなのですね。

(佐藤)

そうです。聞いて⇒みんなでまとめて⇒それを口頭英作文で言えるようになって⇒言えるようになったことをスペル化するだけ、だからみんな正解できたよねという形で授業を締めくくりたい。そこで、教科名や動詞を変えることは、授業でやったことをできたかどうかという意味でフェアかどうかということです。

(丹藤先生)

今でも同じ授業をしますか？

(佐藤)

僕自身も、そんなに文法にこだわりがあって、絶対やらないと気が済まないというものではないのだけど、教科書にはレッスンの終わりに必ず文法をまとめるページがある。今の僕であれば、教科書に文法のまとめのコーナーがあったとしても「教科書は教科書だから」とそこをスルーすることもできそうな気がするのだけど、この授業をやっていた当時の僕は教科書にあるものをスルーするのは怖かった。でも、黒板を使って講義をして、ノートをとるという形にしたくなかったので、いろいろ考えて作った授業スタイルである。

このフォーマットを1年生の早い段階で導入して慣れさせておくことで、3年生で扱うような高度な文法であっても対応できるように育てたいという意図もある。

4 授業を通しての感想

- 自分が中学校の時は、書く活動ばかりで話すことがほとんどなかったので、話してから書くという流れがよかった。
- ひとつの授業を語るには、その前後すべて、膨大な情報を理解しないといけない。中高一貫で教える場合は、高3のこの時期にこれができるようにするために、中3のこの時期にこれをやるという意識が大事、そういう大きな流れの中で、何かを勉強する研究会はあまりやられていないので、ぜひこういう勉強会で使うといいのではないかと思う。
- 授業のはじめのルーティンワークが決まらずに授業がダレてしまうのが悩みだったが、今日の授業を見て、毎回繰り返すことでできるようになるのだと実感した。
- エネルギーが授業ありがとうございました。これを継続して生徒にどんな変容があったのかを教えてほしい

(佐藤) まずはグループワークのやり方の練習になっていると思う。この活動を繰り返すことで、グループワークが有機的に機能するようになった。あと、このワークシートを埋めるために、教科書やワークにある文法の説明のページを細かく見るようになった。

確かに、みなさんがおっしゃるように、いっぱい使わせてその中で英語が使えるようになればいいのだけど、私たちは時間で動いていて、そんなに時間がかけられない現実がある。また、業者テストなどでも三人称単数でsを落とすと×になるので、そういうジレンマを感じながら、テストの在り方について考えていきたい。

- 普段見る佐藤先生の授業はオールイングリッシュなものばかりなので、まず日本語を使って授業を

していることに驚いた。それでも、僕が受けてきた文法の授業という、先生が説明して生徒はノートをとるというものだったので、生徒が主体となって生徒が説明するという授業はイメージできなかった。新しい授業イメージを持つことができてよかった。

- いつも見る佐藤先生の授業の生徒は、英語で教科書の内容をスピーチしているなどレベルが高いと思っていたので、このテストは簡単すぎるのではないかと最初は思ったが話を聞いて意図が分かってよかった。
- 授業内の学びを、自分の言葉でまとめるということは、文法を学ぶ上で大事なんだと感じた。
- 一斉授業では、能力差を考えることが難しいなと感じた。テストをすることで自分の能力の程度を把握することができる。生徒をしっかりほめることで生徒の動機づけをしているのを真似したい。
- 生徒が暇を持て余さない現実的な佐藤先生らしい授業だった。英語科の学生は英語が得意な人でフィーリングで英語を使ってきた人が多い。文法をどうまとめるか興味があって今日参加した。文法をまとめることは大事だけど、中1の段階ではしっかりまとめることがよいとも限らないということが指摘されていて、こういう視点は僕にはなかったと気が付いた。どういうレベルで授業をするかは生徒の実態も考慮する必要もあり簡単なことではないなと思う。
- 全員が授業に参加しているのがすごいと思った。グループで文法のまとめをすると、ただ友達のワークシートを写して終わるのではないかと心配して見ていたが、それぞれの活動に確認のタイミングあって、スモールステップを踏みながら振り返りをしながら進んでいるので、生徒たちはできるようになっていると思う。

(杉本先生から)

オールイングリッシュで授業をしようとしているのは正しいし、そうあるべきだと思うが、「オールイングリッシュでは文法の指導はできない」というのが引っ掛かった。逆に言うとも英語で説明できるレベルの文法で十分である。ハンデがあるとすれば日本語の文法用語を使うか使わないかである。でも、生徒が理解できるレベルの文法というのはオールイングリッシュで説明できる範囲のものと考えちゃった方がいいと思う。そのくらいで考えていくと、言語習得になるべく近いように、真似をして、意味が分かって、使い続けていって、段々慣れていって、言葉が洗練されていく、その段階を教室に持ち込むことは、僕自身の経験、見て来たものからいうと不可能ではない。そこにチャレンジするといろんなことが見えてくると思う。一度に全部解決することはできないが、そこにチャレンジしながら、どこまで教えればいいのか、どこまでわかればいいのかを考える。文法のまとめは教科書にもう載っているのだから、載っていることをわざわざ時間をかけてやる必要もないくらいの感覚で、開き直っちゃって、「文法の説明はそこ見てごらん」で済ませられると思う。ぜひ生徒との英語を通じてのコミュニケーションの方を大事にしていたら、授業をどんどんコミュニケーションに、そして生徒の発信と発話の時間をどんどん保証してあげた上で、最後になんとか収束させるところが先生の苦勞のしどころだと思う。文法の指導は明治時代から解決していない問題である。だから、英語教師は常にこの問題にぶつからざるを得ないわけなので、やるだけのことをやっていきましょう。

おわりに

今回は僕の授業を見ていただき杉本先生や丹藤先生をはじめとするいろいろな先生方から意見をもら

いました。ノスタルジックな感情とともに強く感じたことは、やはりこうしてこそ授業は上手になるのだということです。大学に来てから教養教育で英語を指導していますが、誰かに授業を見てもらって意見やアドバイスをもらうということはまったくありません。大学生は大人ですし、そもそも単位がかかっていることもあって、僕の授業をおとなしくまじめに聞いてくれています。本当にいい授業が提供できているか？実は「くだらない授業だな」と思っている学生を単位を人質に我慢させていないか？今日のスパルタンイングリッシュで先生方から意見をもらって自分を顧みなければいけないと改めて思いました。

僕はいつも学生に、「自分ができないことは人に言えない」と言っています。学生の前で授業のやり方を指導する立場にあるからには、自分が模範的に授業できないといけません。教育法の授業や研修・講演では「コミュニケーションだ」「言語活動だ」など聞こえがいいことを言いながら、普段の自分の授業はごりごり日本語の一方通行のめちゃくちゃなもので、肝心の生徒が飽きて（寝て）しまっている・・・ではいけない。まさに言動一致、学生にいつ見られても恥ずかしくない授業を普段からするように努力しないとダメだと改めて感じたスパルタンイングリッシュでした。

そのためにはやはり自分の授業を公開して誰かに意見をもらうことが必要です。授業の提供をお待ちしております！

（文責：佐藤 剛）